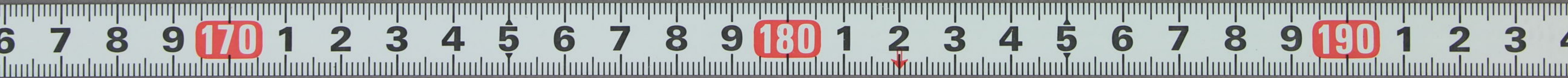


俳諧袖珍抄
文及消息之部
五



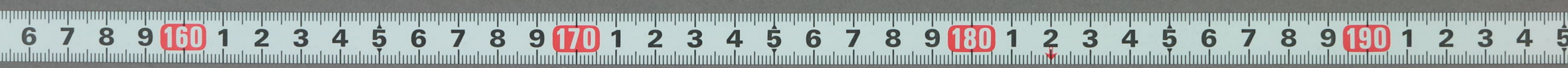


俳諧袖珍抄 一巻

古燈全黙池輯

梅芭蕉癖

菊と東籬一さうえ竹は水邊
 の君とわら牡丹を紅白は是花
 阿りて女養子けうさるる落葉は
 事世よこほみきさうさるるされは
 死原はつもの事よや柳を以
 境さうつ十時芭蕉一もよ成
 桂風を芭蕉のころろよかあひ
 きんぬ株をさそあそあ葉
 茂るるさわりの花をさそあ
 芭蕉の折湯もかきさそありて
 人呼てる芭蕉の名と千四友門
 人とまたあつて芭蕉をうま格を
 こらちてささくはれさうさ
 芭蕉のうらみぬひとさあ
 かくのゆ柳をいまして芭蕉
 既に破れんとすれはかれはさ
 の海に地さうてあつちさ



人しく、重のおちの思のかさびれと
 うちしく、海のみおきて、うらめさ
 せぬすゝいしも、海にねまひ
 くりぬきぬ、ぬいよ、やと、きよ、旅
 舞のひきよた、より、人しく、の
 う、れ、を、海、の、好、使、う、さ、ち、ぬ
 こひ、さ、も、終、う、こ、を、の、暮、秋
 と、さ、う、し、さ、さ、い、色、色、う、候、と
 そ、く、と、一、五、月、の、か、さ、た、た、い
 ち、ま、ぬ、の、み、け、ひ、も、さ、す、う、ま、を
 う、さ、れ、い、ん、の、ち、き、り、も、む、じ
 う、な、く、い、ん、さ、げ、は、ら、り、え、あ、ち
 さ、う、て、古、き、危、も、や、さ、く、二、回、の
 葉、を、け、お、く、く、く、枝、め、程、ひ、と
 き、ま、け、く、割、り、け、の、枝、お、け、
 や、さ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 一、南、よ、む、い、他、に、能、く、水、樓
 と、ぬ、す、地、が、不、二、一、お、り、て、梁、門
 京、と、す、く、免、て、あ、ぬ、り、ぬ、江、の
 際、と、す、く、の、後、よ、く、え、て、月、と、見

め、た、り、よ、ろ、く、く、く、初、月、の
 夕、ま、り、あ、さ、と、い、ひ、あ、と、く、く、
 ち、名、月、の、く、を、け、ひ、く、く、て、先
 道、意、と、く、く、く、く、梁、門、く、
 終、り、と、お、り、あ、さ、く、く、く、或、す、次
 と、け、て、風、鳥、の、尾、と、の、く、ま、は、し
 先、者、腐、破、れ、て、風、と、く、り、
 せ、た、お、く、く、く、く、く、く、く、や、れ
 ら、い、さ、ぬ、と、れ、れ、も、さ、け、り、
 ぬ、く、く、く、か、の、山、井、不、村、の、鉄
 木、く、た、く、く、て、く、性、く、く、く、
 極、ま、い、は、い、く、等、と、く、く、く、く、
 め、法、横、渠、の、新、葉、と、く、ん、く、
 候、雪、の、ち、く、く、く、く、く、く、く、
 其、さ、く、く、と、く、く、く、く、く、く、
 並、ひ、て、風、雨、と、あ、く、れ、あ、ま、と
 ち、く、
 梁、門、舞、
 結、ぶ、あ、さ、く、く、
 文、あり、
 七、三、の、秋、か、り、そ、先、く、ま、を、と

梁門舞 結ぶあさくくの時
 文あり
 七三の秋かりそ先くまをと

心とせえて物の愛をわがとて
 ろころり今は昔おちやけのたふさ
 剣と獲よこさみまふけのくしち
 手換ともしこをわりのきさのく
 り手羽羽のもすそいねよひのら
 一しころりまをまは人のかえよを
 阿んくくん
 枝のたのころりもけよまをま
 くきん北極もあくまをまの權
 海あまあむつるま決定すまより
 中されまをまの威はのかまよ二ま
 うしあくくくくく

送僧專吟詩

杖杖よ子鞋とくけくまをまらち
 一衣とゆくとすくえ福まをま
 よひのけりめ徳をまの武はの東
 深川の子鹿まをまのけり
 一歩まをまのまをまの徳まをま
 風特とこのまをまのまをま

斗蓋の御のまをまのまをま
 伴皆徳那まをまのまをまのま
 の徳まをまのまをまのまをま
 まをまのまをまのまをまのま
 一まをまのまをまのまをまのま
 久一今ゆまをまのまをまのま
 上まをまのまをまのまをまのま
 かの一まをまのまをまのまをまのま
 慈の喚聲まをまのまをまのま
 乃れ用まをまのまをまのまをま
 一まをまのまをまのまをまのま
 杖とまをまのまをまのまをま
 おの毛れまをまのまをまのま

笠張況

子鹿よひまをまのまをまのま
 ひまをまのまをまのまをまのま
 一まをまのまをまのまをまのま
 まをまのまをまのまをまのま

陽洞のふらふらとて中にお
伴のふらふらとて目よら
あれあの手の極の極れまの
下と況しやうらめと捨ふやと
あや味あつて大田の成ちの
うらまきこもれこふま極
のさんやつけすれ板まけけ
とらえて田の極は候のま
あやう上下の極すえあ
こはあつてくれしやとと
ありぬ
すいこやまの極のふら

用居箴

あつて心よひこころはから
けりあつて心よひこころは
あつて心よひこころはから
けりあつて心よひこころは
あつて心よひこころはから
けりあつて心よひこころは

あつて心よひこころはから
けりあつて心よひこころは
あつて心よひこころはから
けりあつて心よひこころは
あつて心よひこころはから
けりあつて心よひこころは

自得箴

あつて心よひこころはから
けりあつて心よひこころは
あつて心よひこころはから
けりあつて心よひこころは
あつて心よひこころはから
けりあつて心よひこころは

机銘

あつて心よひこころはから
けりあつて心よひこころは
あつて心よひこころはから
けりあつて心よひこころは
あつて心よひこころはから
けりあつて心よひこころは

うして唐乾元の貞ならぬこれとあけて二月とせんや又二月とせんや

慈業子歌
え神仲を 芝草

注右銘

人の能とつあし好う紙おのれ。 長と流とふく乳

詠曰

ものへの唇さうし秋の風

魏之銘 山素堂

一魏市愈山 自岷稱箕山
莫快首陽賦 這中飯顛山
魏公のかまほふけさかこみも
阿は後恵子うつこふ輝くも
あつてまがふひまらのひささも
是をたくみよつけてたかふ翁
うをんとすれはたうしてのりよ
阿はつはさうえうううて海

とまうんとすはうらうらうら
形一阿は人日子危のみまは種
入つたよものありとまをた達の
心阿はこれやそ用ひて信士素翁
よをてこれか名をえさうむ甘くと
張の右に記す世のこれ山をまて
かこつてうらうら四山とまかよ七
飯顛山の志社の信の地よそま白
うをかまこれの向うりまの翁翁の白
ふかえうて系翁をまきこもせん
とまうらむあしむ阿はちかまの
翁とまこれらう村の一書もま重
とひるまて飯顛山もあうしそ
せんともまあうり
物ひらつ魏のうらうらうら

梅之銘

こがくここのれ阿らわん橋町
とひる阿はを翁してむ月さ
さうたあめり飯顛種もうや

是中してははとらんを千れ
の風情胸中をこころひて物あら
らぬくや風情の魔心あらぬく
家も夜下して柳をさうり後
くく百歩をたたくて杖杖い
跡に命をむすふあゝえんり
風情終にこころをかからんを

更科映捨月夜遊

とく映捨の月をんとまきり
ありはれ八月十日のいふと
立ををきく日敷すくれけい
敷くあてをきよき柳すかき
ふこのそいそ敷更科の里
ふら山いふいそを里より
甲よりり南より南より横より
あしてすきすきさうくもあら
はかとくくふ免れともんを
すきをねほふ山のすうくわ
ふくさ免れのみとらひはんも

とくよりくくくくくくくく
あふあふあふあふあふあふ
らんと思ふあふいそく後も後も
けきい

あふけや映捨の月夜遊の友
つぎのひもすく更科の那を

興成人文

大和の五長尾の甲とくわあを
きすうり於ききよはくは山
うてあきよはくは山
心あふさきよそ夫く母のおえ
しんをそあのおうくまあ
ひをあよ本子のあうけあ
と我直て岩尾めつくくすあ
ぬくつく杖とく免れを携
てい海業のをあともなりぬく
茶とくく人よと夫母よつて
あくさ免れとくく常あらり
あすのくくくく春をあめん

とてつて安あれやうとていして
考も通す古人もかたよとよま
んひり

そつらぬたぬや敷すもあはれ

吊神秋七日雨墨文

久保の文月七日の秋夜をまきり
こち白浪詠所の岸をひいて
鳥籠も橋杭とさう一葉籠
と吹打とまき二葉もを籠
とさしあふてさみひれとた
るさんち流りかちと一葉さ
けそらわうと遍照小町を飛を
吹す人なこれさうて此二そ
と揺りて雨墨のころろとま
さかんとす 小まらうとぬ
さうまうほりも橋やさの上
通照うう
七夕ふかきひらとて結念箱

秋夜

雲竹樓

依の葉門を舟とつては橋や
阿らんあおこのさよのやう
むけつは妙を画てこれと後
せうとやされりれい君い六十
手阿やう予ハ既よ五十年
ちいしとまたる中けい
君のかさうと阿うとす是
そくしとつよ橋まとも
てす

こらつむけあつたの秋の書

存折賛

此存のされと名付るものによつ
ううとめてまをひめて後
枝葉の善物とあはれつゆら
まの山よりわく何本の里の妙
う胎のがらみあつてやうい
横植ううといはれ入と呼とま
人以上の具と名とあつてむ

とつらう人まじりゆのよきもま
よわくおとろくひひきうれ
はそくくむなまはて世の中
へ横つらぬ人

此はちのむく桂の木のわ

華ははあし町賛

何れあつらひ善よしと
まもたさくつらまの人から
アつてんかあつてんか
めし子我の中わらし今さら
現すまのちあつてんか
しひも又まはあつてんか
あつてんかあつてんか
たつてんかあつてんか

歌仙漫

作徳ふね山は花ををたつ
個の枯葉と吹てそそあは
とひす吹葉くすくす

のままをあつてんか
つらくあつてんか
てはつてんか
ひつてんか
只これ大教自然の他若き其は破
れて好転し
これかまをわけてお開けん
とまをよしてまを送りし時の懐
ありとま

西の上人賛

すてまをわけてお開けん
まの海りたさくつらあつ
花のすりいれろすれ

尾景詩

金草と得てて教てんか
まの士の志し文質備あつ
まをよするのいさほつてんか
尾景の義と骨よして実と務

うゝ老莊を愛すしひまけは
將と肺肝の病を治すはむる
ちぢむと十とを治すは九とを
やばとを治すは九とを治すは
四とを治すは五とを治すは
老母と老父の種子を治すは
ていすは母はたふすはれども
辱のちをいひりて風をいひ
てて手仲秋の三日内井を治す
彼の枕は月とをいふとて種を
杖と身共治すはさうは地を
いひして治すは息をいひて
廿七日の夜は月とや七十年の母
いふは七十年の種子をいふ
と治すは種子をいひて歌の又
十年はこれいふは公のいふ
後おしきりても悔すは
養はるるのれき秋風は吹ま
しれはるる子の枝のいふは
いふはるるはるるはるるの

心さへいひて終るは老母の
うゝみはるるはるるはるる
しきかありいふはるるはるる
親族のいふはるるはるるは
月をいひて種子をいひて
予うを治すはるるはるるは
さすはるるはるるはるるは
のすれはるるはるるはるる
ていすはるるはるるはるるは
るるはるるはるるはるるは
のけはるるはるるはるるは
おしきりて人共はるるはるる
らひはるるはるるはるるは
子のいひてはるるはるるは
ひあれむはるるはるるはるる
いむすはるるはるるはるるは
おしきりてはるるはるるは
どのんとすれはるるはるるは
んとすれはるるはるるはるる
しすはるるはるるはるるは

むらあのみ

秋風をなれし時 木葉の枝

成秀の屋上の松と信の洞

松のうしろに五尺のうらりも枝さ
 たるもの一丈の枝よらんをがさ
 世に毒とてこすやのしゆ
 とあやとりをよみはつと起す
 筆は似菊は似松は似て浪は
 とくぬ時牡丹をきする人
 弁舌とあつたはしゆらう
 と作さるる人を小婦を愛て人
 とあつそふ橋本権設はも
 とんて枝葉のかしらとて
 唯松ひよりあはれよりの四時
 常盤うしてまのもまけ
 きとらう楽天曰松はも
 筆と吐友よ子葉をけり
 人目とらうとらうの心を
 すののみははれ長生係書の

言歌をなせしりて
 元禄四年仲秋日

我余記

古の松よふふ中まはれ
 かこころつてて悲とよひ
 とす縁麻のよりの志をねの上
 くの習巻をぬひものめ
 ちんこの愛りはの姿をか
 のれはを層よ迫くとも
 跡うとくまれらんや
 一物とをんわふらじ
 び紙のよすやん
 や火のよもあはれ海士の
 の費さつとひ
 ぬをよと思ひて出
 ぬといふ
 さをてて
 母事の上
 十三

外の月とやと一蓮華の交
孫の下とよまふよまむくろれ
きりしんをすて昼をく
みて宵中よおひ二百倍の
安静とてころろと夜とて
くしてみのふ大垣の廟とて
る程もはげしひとつふと事
の情とやうとめづれと家
とまてくすものよけくれぬ

竹任庵記

石山のかく岩屋のししろう
山阿つふふ山とてふふふ
ふか寺の志とゆふふ
林とてはそふふとて
て雲霞とてふふとて
ふふふとて八幡堂とて
神體ふふ陀のそ像とて
唯一のたつた基のむと成
ふが光とてやとけ利益の

雲とおれりりりふも又ふふに
り久人の信さうりれいといふ
ふふ物とてふふかてふふ
み折る子の戸阿り通相無折
とてふふを折るう壁とて狐
裡ふとてえうり竹任庵とて
阿ふの信何うとて南か士
ふふとてふふの信又とてふふ
と今いふとてふふとてふふ
中ふふ竹任夫人の名とてふふ
やふふとて市中とてふふとて
はうりあてふふとてふふ
身とてふふの信とてふふ
鴨はふとてあれて奥の信
けふふふふふとてふふ
阿ゆとてふふとてふふの信
とてふふとてふふの信
たふふとてふふの信
とてふふとてふふの信
ふふとてふふの信

先んずる結を人知して却月の
 はしめりてうらむ入て山のやそ
 如くともかまひそむるすまら
 善れぬ物もさうけはけし心あ
 さいはむ移うりて都を去るし
 正しはしとるうしをのあつるさ
 阿と木家のつてんあふん
 舟とそころと無してそ中い其
 禁東南よりけりそ身は清の御を
 こゝろのいふ事申さすけりそ人
 家よ水はとけをててて南を味
 よりおろしわぬ海を渡して味
 し是れのかたが良のきねより辛
 味のかいすみえ免て味はう橋
 阿ん物あふり舟もさる蓋面を
 かすよ木柱のそを禁のむ向よ
 子首とておけけりて怒りよめ
 やみのやうま野のてくおを
 美奈物として足すといふ
 とおけり中にも三上山のいふ海の

傍よかひしてむさく申のちよ
 すころよあまひあひくれ回上
 よ古人をかきよさうやうお
 又う障り橋とさふありそ持
 の里いひてころろあつては
 るちころろとてあけんそ茶葉
 の姿あつたりふかぬをこま
 ふうしんとてしころの橋よと
 ひのけり松の桐つくり松の
 糸中とを交て橋の橋あけと
 名つつかの酒堂よ葉とよと
 あひきき橋よとたとひす人
 こまお徐徐うらなをあはれ
 只膝膝よ心とありて居敷
 ろん足とを投おけりよ心と角を
 ひのりてやと入る心と心と免
 れる阿の音の傳もを渡して
 うら橋くともこのまをともひ
 て一燈のそまふりてころろ一は
 こそほけり人の群いひてく

傳のくわくみむくわす
きもり持併二万と指てこ
この物とさむ(玉)おれと
うまつこくを筑造を良
山の傳の加後甲斐傳
う殿子よて此の傳より
いふまゝのうをゆゑ人
歌を乞へくおくと傳を
幻傳の二文字をかくるや
まそたの記念をふぬす
るく山伝とてぬれとい
あぬくこくもれ 本書の
核筆越の首書けり秋の上
れ松よりけり屋をすれし
ゆか人しよ心とてか
あやのふ里のこのも入
てあのみれ指しゆしを
の目とてけいぬか
〜ぬ農法は既ふ山の
うれい歌の静く月とす

ての歌とともれの傳と東て國
向し是歌とてかくとてい
ぬくよまてとの山神の
くさんともれぬれぬれ
てまのひい人ぬれ
年月のうつらつて
よまのやまの伝はな
う〜や〜てひい
よひをさ〜もぬれ
ゆとせぬれは
ま〜く〜の
つすらつらぬれ
よぬれ老林の
實のひ〜
れすぬれぬれ
ゆぬ
ゆぬぬのむ持の本もぬれ

酒蔵考

山を静くして性をやゝあひれ
 い動て情とふくさむ勢動二の
 万うして位家とえくものあり
 溪田と取々ととり目と位境と
 海一は風と特と名も偏り成
 すまゝ意と情とあゝ名と海と
 本とつ門と我情とあけく分
 のの門内よふとをゆゑと
 書りかの宗體とあゝとゆ
 とれ歌と二書くゝとてあう
 且それ等うして才文の事
 二つ体法二子の性とつてま
 めもそつうとふと本と種とを
 あゝとてあれとてとれとあす
 そゝとれもの海とあ田と
 塔とた名と油ととくゝゆと
 抱てと上山とむとふと世の
 かとらと竹とれと松のひと
 波とあゝとひとえの山とひと
 えねとあゝと入ととつとの網

石山と名府のあゝとらんおけと
 長谷の花とあゝとて鏡
 山と月とまゝと静と流と海との
 りとれかとれとととと心の
 竹とあゝと又と行とあゝとふと
 四とつうとたと入ととつとの網

十八樓記

美のふふうと門と修てと橋
 ありあゝとととととととと
 いあゝととととととととと
 左ととととととととととと
 うととととととととととと
 くのくれて岸ととととととと
 竹のととととととととととと
 布ととととととととととと
 りととととととととととと
 うひととととととととととと
 てととととととととととと
 うととととととととととと

あすは竹のりをぬぐうは
りもすくはうり入の敷
も月をかきりてはむす
るかり火のけもさちく
言探のものとすねす
中とにめさす一を執あり
しかの偏依の八のふ死西
の十の境も清か一徳の中
もひく死たりもくは橋
いんてぬく八十八橋とい
中へいさし

此あつり月とてぬぐひの

暖感日記

元禄四年未外月十八日暖感
遊ひてすまう藤橋令
ん兆ともしも来てさ
東に海をすうは行まけ
とくむ(ま)うはくは子

くり海引あつり今中の序

陽二万あつる依依とさむ

松一祝 文彦 白氏文集

本約百人一首 世徳物語

源光物語 大佐日記 松葉集

と直虎の翁法出くさる事

酒一壺をそるりぬのす

中酒葉の物語も来より

てまわしは家賃物と

すれて清閑とこのむ

十九日午は徳川寺に清つ大井

川あふか新し流山寺と

松尾尾の里に流けり高き

は流く人ゆきひおけり

林の中ふ警年とさとり

すて上下の暖感と新り

目とくさるりかの仲ふ

死んて来りて弱とあ

此あつり月とてぬぐひ

ことごとくもまきいふ折々の所
 葉の中よりあつたての枝を植
 へりかゝるも強備後後の上
 へ起りてはるゝ敷中の曇芥
 とふれり昭君村の柙巫女席
 の花れむもむもひやく
 くはりや竹の子とわづ人の果
 柿山敷れまけてや竹の如
 斜りよ及て茂栂やうづらんね
 京より来りてすま来りて冷
 青よりり叶

廿日水暖暖の来んんと柳紅
 尾末もすま来途中の吟とを
 得

けふ又海より信のけりやまぬ
 茂栂今いむうれあつたの
 作れり中へはてはるゝ敷破す
 ぶらりしはかりみりれりる若
 のさかきよりも今のほえれりる
 さかきより心とくせれ彫せし線

画は蟹も同じに破れりるあつた
 奇ふ懐れも存の下のかられりる
 竹椽のあつた柳の木もあつたか
 けりりれり

柳のさやむり若のえん神理の若
 ほどくまは木外敷ともも月歌
 中へやえんちとあつた暖暖の山 尾柳紅

七来んの方より葉子酒葉のま
 ちと贈ては青い柳紅まぬと
 めて故を一張にえんそり叶れ
 は敷もつひひひひて敷ひひひひ
 ぶりもあつた起りて昼の葉子
 をふれりるあつた暖暖の山
 ぬすす七来んの方より葉子酒
 うへ一張の故を一張のふり
 しくあつたあつたあつたあつた
 四くさくさあつたあつたあつた
 知りて暖暖ぬれぬれぬれぬれ
 京より来りてすま来りて冷
 廿一日ぬれぬれぬれぬれぬれ

あつくそのけきもなりしゆん
 船よりおくもりあれくおとろ
 れて終日狭くゆりきり及て
 ち東東よゆると秋の人も好く
 昼時それいれおぬきぬき
 以初夜危くも出控りて友能を
 刃即してあくさきこは徳を
 廿二日初め雨降るり人あ
 くさひきき中へにむき出して
 極小其洞
 妻は括りもの無きこを
 酒を飲ものへの一は
 熱く得するもの無きと
 徒然と得するもれはほれ
 とまます
 さひくさぬくはくの中すと
 西上人のよみ侍るさひく

自あくへて又く

山里よこを中へ得とよこ
 ひよりすやんと思ひものせ
 獨りおぼとあまのけを
 居士の曰るなまの雨とゆき
 主はまの果とくあかと素
 びと我茶と常よあそれむ
 うき茶とさひくさかんと
 とを何と寺は福居してひ
 ちるあまをより清息すし
 ねよりゆりゆきとて朋友
 息とも何とことくそ井
 状よ予の得控りて芭蕉の
 君て宗波よあ
 又云
 赤信とてあろ杖二丈ま
 しく樹一か外はまよ色
 んんとあく
 くら樹茶色よあら七

嵐をこらえり

物寄の雲をえりてくまの
如代やあさねのむらり物何れも

廿三日

子とすく木魂のつらさの月
交の萩や木魂のつらさの月
筆やあさねのむらり物何れも
妻の穂や涙のつらさの月
一しつらさのつらさの月

廿四日 歌落柿冷

豆植の畑も木魂のつらさの月
名も及てす来京より来る
新留のつらさの月
ふり消息のつらさの月
編るつらさの月
廿五日 子那大はつらさの月
史草尺牘

歌落柿冷

源対喙峰伴鳥魚

物荒 森似野人居
枝改 今欠赤札卯
青葉く 改堪学書

為小督懐

強挽 愁情出深雪
一輪 秋月野村風
昔季 僅の求琴韻
何変 孤墳竹樹中

途中の心

行々 心ゆくも旅も

美山 苦く感句

杜門 賈白陳金已
對空 拚毫黍少游
乙州 暮りて武江の柳并柳
ふの 帆船一老世中

白井崎とてくまのつらさの月

後 簀のつらさの月

舟をよる人よとてくまのつらさの月

空の如くは女に類をかりては
つらうを多てゆるす地忍
申の別とらうより雷建電降を
詰定まると時電降止るると
かゝ極のそくちひさふい常果
のこゝ

廿六日

英和の二種をまけの電草
こゝけの雲よりうけたま
偶々この申しけあふ角つてたま
人のくむちち釣瓶すあり草
るのこゝに夜夜柳のりやん七州

廿七日 人車は此路日ゆ来

廿八日 夏は柱まうりよとのい即
て候位して是る心音おすこと
る時ハ夏とあす陰早て大あ
め陽おとらうく水と夏く
飛ち散とやむ時ハ心をあ
欠く帯とまおぬす時ハ世を
着るるとつり腰括記は懐安

母在用の様をくれを控めて妙哉
つくとすふあはる人君子あり
着る候は此路日高想は夜露の
音散散よ夏又あうりやるとん
けと成るるとらういとゆる念
る夏は秋我々志保く仔細四里
中と志るひあうておく座を
仰く起うり柳の芽とを
けて百のうはと秋のとく候は
時とまあれは秋時ハとらう秋
夏時ハ然りと其志とらう心素
候とらうとらうとあけ色いあ
へて是てすこ秋とまわ
廿九日 日暮る夏はう候のたを
月々

古 鏡 聳 天 星 似 胃
衣 川 通 海 月 如 弓
其他の候は京殿のつり古人を
そ他時ハつり今を京

廿日 那々

江州平田の盛寺を由訪る尚白千
那る消息

竹のまやふ跡をのられおを
此丁の風急舟より御月が尚白
是也

二日
曾良より青野の花を君の慈
舟に備けしより武江四友門介の
樂がこれ五十年を待たず

三日 熊野海やこひつ入る友の海
大崎やこひつれくをせの果
夕陽よりりて大井川は舟より
て是心こそぞて戸籍帳をの
る百海をそよよ及しゆ

四日 船敷の雨降つくと終日
終敷止ら尚を武江のりとも
可終改し敷のり

五日 舟より揺さうらるる舟
終日外屋より雨降止ぬら尚

掃中をせんよ名跡をうらり
表口の二つくをえめくりて
よみこれや色紙をきき聖の依

仲父大佛記

いふれま河波たて新大佛と云ふ
はあふいおを良の於東大寺の東後
系上人の四法なりとて四里を
年をこえて四友宗七宗を以
とらふてつとまひ今てあ地
一とて仁王門持擲の依を松
の依をの依よかく我てねまのい
てくよふん礎をうらすよの
みくしてのひけんうらるる
きく知つてんれつひてを
其を粉々のけをんらいつて若の
依を跡をり序伴のまり
忠實のこゆつたれておれ
よ好れてつとつとよんくまを
よみくはつてつとつと

如く上人の法教を何れもあきらめず
も亦のかゝるに安直しきりや
ここにらるれば人の力を費し上人
の教にうらむるもあはれしもの也
く候も爲て候も候くむれし
石基にぬらふも候也
又かく物事さるるしきれ止

野風法師子孫

風流ハ若しやゆは忍びあはれ
深し凡を用ひて枝をまひて
衆の乳をくく咽して言はるる
羽のきよき候也

白雲文吟

くもくもくも又月の玉すくは武陸
より古甲より海より二十と名の月
れもさるればや山半の雲をさるも
おろし折してをさるふもけしき
かうじし何ともむむしき

くもくもくもかゝの雲あはれく
あはれし候もあはれし候も
のみひあはれし候もあはれし
の正候をさるふも母の白雲とあ
はれし候も子孫をさるふも
やゝあはれし候もあはれし候も
みよ候也

くもくもくもあはれし候もあはれし候も

紫雲

代のかゝる人にも古甲からまれ
くもくもくもあはれし候もあはれし
をさるればあはれし候もあはれし
候のみよつてはあはれし候もあはれし
あはれし候もあはれし候もあはれし
くもくもくもあはれし候もあはれし
神をさるればあはれし候もあはれし
さるとかゝるあはれし候もあはれし
末修治の山中よりあはれし父母
のいよもかりせしとあはれし候も

うしもしゆく男やまのくらし
くわあそ

古きよや麟の跡は後手のみ

幻住危賦

五十年やうらふふの昔松の
先本とありて楊梅のかくさ
くくねひ又こせれぬのさそれ
てりおあふはるるさそまふ
かの空澄つたことおたうほ
能圓の改地の松をさこりて
松島白海一面を其へ海産れ
は山に波とぬは只若者も命
外の浪をさう又さうさあを
たやらんやんとあさうさあひ
まゆつと何れもさあゆうとま
ものあああやうねと袖さひ
らえさういさそそとあゆらひ
あうり松後のさあおむくさ
るをさあさあゆらうさあ

海のあう松よきひすを被さう
あまの海とらうあまよあゆの松
のあつれとくやうさあの一松
れやうとさあゆらうとあゆら
とさそ山とさあふさとらうあま
とやうのさあさあはあ松あ
つらゆしてさあふあ松あんを
らうかの松ゆらうのさああ勇士
若松あ松水子の松あゆら人の
はあさあひり松とさあやうあ八と
さあさうのさあゆらうと松あさ
らうのらあさう松あゆらうとさ
ああさあ松あゆらうとあの一松
はゆらうとさあさあ松あゆら
山はさうさあ松あゆらうとさ
とさあさうとさあ松あゆらう
ああ山のさあゆらうとさあ松あ
うく松あゆらうとさあ松あゆら
あさひりてゆらうとさあ松あ

のとめあれはけしめしつら山を
 ねらかりし時志もしくもはと
 右り名めたりき阿ふよ本家
 のつくともいふくふこそ家さ
 ひりうんせよねとひりうんせ
 そ一乃よこのつこて兵楚東南の
 赤あゝ船は五湖にほしうはうら
 けしよんせの山は良のそ根よ
 里かう塔の松はけしめして後
 新の塔は本るこやき坊田の
 橋を言ふれて築はの松原コタ
 せと跡すこ上ハ不ニの侍コカ
 よいこむさし那の古ますもあも
 思ひぢり織田上山コ古人とき
 ぬさほろたけ子丈多崎こり
 けと云山阿り立取山コ公ま
 ふくして思はの里人のきやころ
 せけんねんこ腕手くよふらん
 とくしもの崎こもひのけり松の
 棚化りき米の雲せとあてこれを

松の橋をけとあつてけきぬ除
 夫ら海棠菜の飲樂も市に在て
 かすひすくまを人々立落崎
 の怪ひもなを控しうやむさ
 けお母さすかをひりて嘯
 き辰敷一氣さひのりて中すれ
 ちしく心すこやあつたのちと松
 ひはあともむさくは遠来ひとの
 茶のみとらうとつこつこの中
 とまひて一膳のそあひと酔く
 ちあは夜なる人もまきりりこち
 くらんかけおすかよもね
 お伴コ方とたててよよのお
 かこくあふふをねとくさうまの
 らんアまきとさる良山の信は海
 コよつあひとあふとあふ人さ
 敬とこあひとあふとあふと
 アそお伴たの三字とあつて
 甘きあふらうとあふとあふと
 人のかこくもあふとあふと山屋と

つひ旅ねとつひさきさき夢かきふ
 なるよしもゆい流木首の松を並
 の昔々のはくち枕の上の柱よりけ
 くりひらちちまの松林の里人
 船へ今あつた松の端へひゆりし
 兎の豆畑かきふ船と系舟よりら
 ぬてあつたりと音一貝の舟に
 舟人も歌やまつつらつて歌を
 とし船の周雨をわづらひも非流
 ころは船のつらひもそひさやうふ
 空とさうも山舟と流とかきん
 とよもゆい流木首つらうみ
 妻といひて人はゆるゆるや
 流ともゆい流木首つらうみ
 心とわづらひつらうみ
 けりさのゆい流木首つらうみ
 ころは船のつらひもそひさやうふ
 つらうみと妻といひて人はゆるゆるや
 考へていあつたつらうみ
 とまつたつて流木首つらうみ

流木首の愛化とて其初め
 すとつひあつたつらうみ
 死つたつらうみ

松島賦

舟とつらうみと松島を接岸
 舟一の舟風ふつて丸淵を西船を
 船は東あつた舟をへはの中三
 里洲にの舟とつらうみ十二時
 百の舟をく歌つてつらうみゆい
 休みの舟とつらうみつらうみ二
 舟とつらうみつらうみつらうみ
 うれなつらうみつらうみつらうみ
 舟とつらうみつらうみつらうみ
 こみつらうみつらうみつらうみ
 舟とつらうみつらうみつらうみ
 舟とつらうみつらうみつらうみ
 舟とつらうみつらうみつらうみ
 舟とつらうみつらうみつらうみ
 舟とつらうみつらうみつらうみ

よしをききまのくねをかき枝
をあらふを發りの末も神いふ
那のよくと悠一野田の玉川
仲のふと玉峰神のふた武のま
のねればさうひよまをあらた
こり地の中のを浦よの地う由
のゆ非あり神あのをふ峰花
文作のふ泉のふふ進て
於あう地つてきこて中を
ゆのあまのねよのねる瑞光
ちにお授ちの時入るのま立
あふ二十二世のむうまを
四神如意に入る湯の夜毎
ひすを故存を改宗再興の
て七半の徳をすなりけは逢
さる海岸の時光のけをひ
一花餘波のひくねのみより
去やうは枝葉はゆるさあ
て屋敷のつてくえんここと
とく其字を宿然とくは美

人のねをねかきまのくねをか
う大山すまのあまを業よや造
化の天工つれのく業とまひ
詞を序まむ

月入城

こく珠巻の月入んをまは
らく本若寺にねりて後所松
中の人しを怪守まひぬはを
とらまて泉のまのまをつて
正美のふをつて後業よ二枚
のまをえすまひのまをら海
とらまてねんも二流よまを
西半をねるかまをんを業よ
西川をねをねてまをの月ま
そまて廿八海に業まをねを
すまを考のまを本若をねぬ
登月い物のまをねぬうまの
海まのまをまのひあをねぬ
中まも怪然は海にねをまら

三井寺の門くぐりやりの月
かましく持敷のむらじゆう舟は
ここの遊ひとおも人の心の中へ韓
愈の文章をもほきひよ買まぬら
詩僧をももともぬき詩人をも
よももくくひいもくも未だ
あはれいりやもも地よふ人を
屋あやとんぬもろくさおひよ
とりてと青の風流とあま
ほは月を長等山の本より
入ぬ

既望と紙

を月の遊興と夜やまに今宵は
二のさのいさあられ船をかこれ
浦あまをさ百も半もこれのわと
あらんたうかまよのあ人の家
のほふ漕がれて群鳥粒若れ月
はうれてまねもあくと船の中
うらやしくふりそふあうを

あはれおとろふあはれとてを
了らるるをさうか舟のほ園を
草ありさきほりく新餅の切目
あまさぬあまわはやくを岸を
指さあくと遊との舟をされく
いさな有れ高き燈は月をすい
やともふくはくかて湖上をわやふ
照りてわくあまさくぬ仲秋をの
月を月のほはあふれむらさを
鏡山とあふあまはしを有あまを
あうら遠くしとかのま上の欄を
いよれと三上水草を左衣ふりれ
て持れあふ十二峰の船をひさ
さかくつふやと月も三年あてを
そと乃ちりちふれをねをいつま
鏡山とあふあまをさもはれとや
しは真とそとてあうくああか
二兼とあまもくあまもくさうか
切あうやうと月をさまをわく
かとあまもくあまの船とてま

あつたふり新佛のま成とふ海や
いさゝみの柳を世れ中よのけそ
かゝぬく月のかゝもこのゝかたよ
京橋美門の敷島の柳を我
そひひもいふふあまひてこそ
あんな信札のちよとくくわんせ帯
叙ねの役あつたやとのふあつた
真由系して事れは家とわらわ真
はまて物さむやと目これ岸上も堂
とあつた月と横川ふかてやまて
姑蘇縁梅の鏡もけちあつた

おとん紙

十月の時のお月のお時をのま
の海へまをそひくうは汐い大燈
の小葉澄まわくく友まをわ
をさねのちよとくく親又ハ袖はより
寄中をわくをそ葉破くふけゆ
鏡の影をわくをそれよりてや
あつたれく男ハ親志の袖よりを

をえやうと柳を降るるあつたを
のまをくくひ降るる花も紅葉も世の
さつたをまのまひくをれとわく
父母とくくくひとくあまの月の
果あんな妻あつたまのわらわを
これとあんとおまふ人あつた
あつた時とを産を持てる女ハあつた
あつたすくくかあつたのくくく
あつた小舟の柳を降るる男も真色
てはをくくくんのまやまをわらわ
く平日漫地のまをえんとけこ玉
川は舟とくくくくくくくくくく
文うくくくくくくくくくくく
あつたのまひくくくくくくくく
くも純子のまをえもあつたの葉の
あつたうくくくくくくくくくく
ひまやあつたむくくくくくく
このまをえあつたのまをえくくく
人ハあつたのまをえくくくくく
あつたの紅紙も花娘のまをえ

こゝにとちううゝの道ひぬらん持う
雲の松を伴くまよとやうり上戸
い長くく人少し日をめくくせ日神う
嶽より反挽のふ何りて家と家
まゝんもの何しはばをすあゝま
くく袖先をまておの持に家
を小林のまけよかされて月言ち
の入およ此女くれとせしむは
うりあり

鳥賊

一鳥小大何りそ名と失うす小
と鳥鶯とのひ大とは備をとの
はるる反哺の教を傳くく名平
の曾子うはす或い人およゆく
人をつけ報ほし廻とあゝて
二里の標とあたりて或は太字の
やとらとあてま鹿とととら
茶と何くくむとの入りまの何
けやのくあまきかけよみは無恥

へゆくあんと行歌の方すも情ゆ
よひのけい後にもおれてかこら
とせす只食粒の中よふお時
いふと徳大又何れをさそふ
う何いそと極中う一人言す
大に物中かの備左の性極強
悪くして籠りの趣と何をとり
有るの瓜のとふこととおそれ
は内は修房の味も好くをうを
黄老の山もは似て時時人
不ふの字を抱てうけは凶事
とひひて慈とむくあゝと何う
ては東橋の袖を何し田井
う何うては田畑と費す粒よ
幸昔の勢かどしうはや成程
のかひことつらみ池の堰と管ふ
人の尸をすまらほるの物とむ
まゝあつて後いはいれあゝいのち
と海やまう勢のよふ何とて
海やまうと竹ふも是れ何むと

かろと大いして其智をせえき
阿やまうし海より心貪欲し
てかろらざる要し海より人あり
く其傍とりの歌氏もこれ其傍
候士も其くしむ時存めく候し
一の導く先んよりして之足
今島に冠せしれんと候

阿羅神と集序

尾陽達左權木事らる人病考
子集と阿みて名を阿し阿と
云何有しは名阿と事し候
予んららたおもひやうとをひ
はら松ぬきし阿し阿の阿松阿
つめておれりといふ其日新あつ
おもはまの日又事し阿やうと事
一はきまらる阿やうの集を阿
阿の阿し阿と阿し阿の阿松阿の
阿の阿し阿し阿の阿松阿つよ
て阿し阿の阿し阿の阿の阿

れんや系遊のへんやう心のは
のろくわさうたうくひめゆんれま
にもつらんを権の大まよんれま
まのまのまんやう阿まよまのま
まのまんとは阿の系阿阿とま
ふれん

銀河序

如夜をより御して城取承事候
との阿まよことまの阿取らまを
阿の阿十八里阿波を阿し東西三
十五里一横やう阿し阿の阿松
谷の阿し阿し阿の阿し阿ま
まの阿まやう阿んままの阿
は阿を其集お阿く阿阿阿
阿の阿の阿と阿れ阿ま阿阿
めく阿阿よ阿く阿も大阿阿阿
の阿の阿を阿やう阿ま阿
只お阿らうまの阿の阿も
本集阿ま阿の阿阿阿阿

しひて誓詞の精意をいふ
んさすらばと自決は海に於て有
布のうつく新海は天よりうけて
思ききくしときえんまは仲の
かよふ岐の昔志をくしこひて
たすしひりつるうとく描らま
せくそくちりうのひはあこ
れい子の持もさこよしひま
の紋飾にあとらねくしてしる
そりうよあんけり

あつ海や依波は横くあつ川

伴野紀行跋

林ありまのたもねく密いもの
はたつやふまのひの
るたすうれこの妻あを其前
いとをたのちふよあひひさ
くろ向井氏と末のねいひつ
すしき契るそ海のまきよか
るどりく甘ふ幸きまきほ

くろの水の砂まき原まき
くして終ふ一掃くく百門の雲
とあはるあくしとくの秋い
もくをその伴野は海す白
川の秋はまうかの波森のま
まきくまきくくのあをれあ
まもかまけくまあすま
まのまのまはまきまおく
一しひたしそまとおく
あひ原くまをま
まみてまきくあつまあ
けんやまきまあれうま
西ひしほまれまひつ秋の

善忠跋

まの戸くくをてあまひ
あしもくまきくみのまの二句
まのままままをれま
あまれうてまをれま
まのま其まやままま

かのうゝを文に玉とすありて
 ちとくしつしつしつこれの解體の
 處くみありまゆりすくま奇
 種新ありけり此は虚聲を奏
 け者といふ人いふくんとこれ
 とや其子と旅と感とあひあひ
 ひ南島の心と天ととや強り
 玉ひのあふこれいさとのさ
 めんとわしとあふあひの作の
 は云の心とくんと静と天の
 物とれ身はすとくんと此人より
 てはるとあひむしとくんと
 まるあふく人あふくくたふ
 下く空とまふくひ空とまふ
 く他はとくすくはくくくそ
 とやふくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくく
 と傳ふくくくくくくくくく
 情くくくくくくくくくく
 此れいさくくくくくくくく

くのくくくくくくくくく
 けくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくく
 あふの者くくくくくくく
 此のくくくくくくくくく

虚實集跋

東とくくくくくくくくく

李杜の心通とあふて養ふは端
 とすくくくくくくくくく
 けくくくくくくくくく
 倦く倦く倦くその心ありあふめ
 西のの心とあふて人のひありぬ
 能く能くや

意の情つくくくくくくく
 あり袖の袖を黄金と稱ふは上
 陽人の望の中よりあふくくく
 うくくくく

下のあふくくくくくくく
 姑のくくくくくくくくく

史記のそら虎の情をもたす白
氏うきと伝ふるやうして初心を
救ふるより好んてす

其旅者動高きまをさるる旅
の思ふ向と勝つ勝の思ふ文字
と清くも心他のやうにゆめ
ほろ美しうて後のぬすめを待

卯月の中は吹雪の浦へ入すし
ろれ山まき染まらぬけく月を
いすく流してまのうきもあれ
うく只此浦のまをて秋まを
すうまや心は物のたぬき
しきあはれ

友とあはれとあつちのあつちを
義とまをさるるまをいしあへん 芭蕉
まをあまふて怪然のまをまを
まをまをのちりまをいしあまを

P 妻の只新るの寺とあひあつ
まをりけ旅衣まをけま西まを
まを飯のまをあつてまをりあま
あつちま

田中一平まをりては妻れかま
あつちまをりてまをりあま
あつちまをりてまをりあま
あつちまをりてまをりあま

あつちまをりてまをりあま
あつちまをりてまをりあま
あつちまをりてまをりあま
あつちまをりてまをりあま

あつちまをりてまをりあま
あつちまをりてまをりあま
あつちまをりてまをりあま
あつちまをりてまをりあま

又さすに浜れくつふかやほつ神の
去前ときえゆく夏の間の中
五月十八日まきの海野にそかの
長子すけりあま人と思ひかく
かひくすくまのそまろふ
そのまもろふまきえあめ
のりまひうのさとまのまて
そのまもろふまあうまそく
のれすひみのまよのあれまを
松のあまらあまふつてく

歌

持ぬすまそくまきあひぢを
しゝつてや人のまそくまひ
まふまの歌
まのまのまそくまきあひぢを
まのまのまそくまきあひぢを
まのまのまそくまきあひぢを
まのまのまそくまきあひぢを

東順傳

夫人赤吹の娘たりて其祖父
河州望田の農士竹氏と稱す
娘とよまひの晋子に母を
よももの娘たりて七十第三
とまの秋の月をやあそびのま
かろえてあまの情ををかこ
まるとまのまきあひぢのま
つまのまきあひぢのま
娘の向をかこまるとて大ま
典のまにまきあひぢの時
まのまのまきあひぢのま
のまのまきあひぢのま
のまのまきあひぢのま
まのまのまきあひぢのま
まのまのまきあひぢのま
まのまのまきあひぢのま
まのまのまきあひぢのま

月信く地へ是もさへては好く
お尋と魚といひては好くは好く
世にあらぬふくむて世にあらぬ
さうさすの飽くまのわく地
も尾も世にあらぬいひのぬ
しんせうもいひては好くは好く
あつては好くは好くは好く
世にあらぬいひては好くは好く
たのしもゆらんまては好くは好く
せんあつては好くは好くは好く
り世にあらぬいひては好くは好く
またしは好くは好くは好くは好く
人々やきと雲ゆりては好くは好く
と世にあらぬいひては好くは好く
ぬくまもさへては好くは好くは好く
あつては好くは好くは好くは好く
何の事ふさゆりては好くは好くは好く
して月をあらぬいひては好くは好く
と世にあらぬいひては好くは好く

花よも先入をいひてもさへては好く
あつては好くは好くは好くは好く
またとては好くは好くは好くは好く
て今の人々のあつては好くは好くは好く
ふまよと世にあらぬいひては好くは好く
何の事ふさゆりては好くは好くは好く
はあつては好くは好くは好くは好く
の事ふさゆりては好くは好くは好く
一 道に世にあらぬいひては好くは好く
直つては好くは好くは好くは好く
ふまよと世にあらぬいひては好くは好く
何の事ふさゆりては好くは好くは好く
はあつては好くは好くは好くは好く
の事ふさゆりては好くは好くは好く

三月廿日

悟然

の事や揚ては好くは好くは好くは好く
云つては好くは好くは好くは好く
何の事ふさゆりては好くは好くは好く
はあつては好くは好くは好くは好く

叙の星の山うつしと雨あはれ
きざりのしるしをくもりて

とて成

廿九日

○
いそぎに奪はれぬかたの
秘事をわいのりきりて
後判もあつたわづらひ
いそぎに奪はれぬかた
秘事をわいのりきりて
後判もあつたわづらひ
いそぎに奪はれぬかた
秘事をわいのりきりて
後判もあつたわづらひ

秋の心ろぬきとて
あつたわづらひ
いそぎに奪はれぬかた
秘事をわいのりきりて
後判もあつたわづらひ

三十日

○
白雲社見

とて成

一石屋の跡は中野の跡
あつたわづらひ
いそぎに奪はれぬかた
秘事をわいのりきりて
後判もあつたわづらひ

日中一のわづらひ

さしくわりのわづらひ

いそぎに奪はれぬかた

秘事をわいのりきりて

後判もあつたわづらひ

いそぎに奪はれぬかた

秘事をわいのりきりて

後判もあつたわづらひ

いそぎに奪はれぬかた

秘事をわいのりきりて

後判もあつたわづらひ

いそぎに奪はれぬかた

秘事をわいのりきりて

後判もあつたわづらひ

いそぎに奪はれぬかた

秘事をわいのりきりて

後判もあつたわづらひ

いそぎに奪はれぬかた

秘事をわいのりきりて

後判もあつたわづらひ

ゆの人多くし予、馳汗をま
りて予も予も味難く候
名このまひをまひてこの
飯じそふりてをまひて
ひらめくあのもはぬし

そ附白

森の中へふふ草をてりて

とつておわり

岩のあふたの橋をてりて

二月上旬

とま

本因様

そと書

幕僚もたて人の旨をまひて
色も色候し思はれ候はれ
相考も落不れ候はれ
い徳も下置す候はれ
一板おれ候はれ
ゆへ候もまひて候はれ
ゆへ候もまひて候はれ
凡て候もまひて候はれ

とりて候はれ
はれ

其古昔 草園集卷七

春桃伝書

幕僚もたて候はれ

なと

岩のあふたの橋をてりて
色も色候し思はれ候はれ

二月下旬

本因

とま

本因様

板淵川のあふたの橋をてりて
色も色候し思はれ候はれ
相考も落不れ候はれ
い徳も下置す候はれ
一板おれ候はれ
ゆへ候もまひて候はれ
ゆへ候もまひて候はれ
凡て候もまひて候はれ

志とて察のまゝ一由人のまゝを
ふ置とて居く月燈云らじい
と仰て是を首のまゝやせし
日本被るはを知らしむと
此の歌神言ひまゝ人おま
きしぬるも一毫の違ひ
完ふはひ

自慢の句

古傳まゝ人の不様を付く酒
をさすともおまゝのりまゝ
若くは馬を付て一物おま
酒もけあ時おまゝはた
句を似せさせん直性
二の極つるまの耐え
芭蕉の清もろく破れん
れ一生これのまに存
おまゝち鼻まゝくお
の何らりおまゝす
おまゝい

飲酒一枚起精

もろくくわの於まろくの上
まじさくくまゝと居り
あゝ又おまゝとく
飲す酒やもあゝは
おまゝの南を河
ひぬく但まゝと思ひ
一杯のむよりおま
但之故四粒の着
ひの海軍も決定
き海軍もまゝと
おまゝの海軍も
性まゝし
人おまゝとく
一文不
下
一向く酒を飲

右飲酒一枚起精の
何のまゝおまゝ人の

子のまの筆をく掛物より一床
はうりまの海より一床をま
中化有らうと書しあつひま
あつ大海とせしれはあつひま
と書し大海のつゆあつひま
白

ねの初とあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま
十七日

廿角丈

○
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま

あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま

○
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま

五月十二日

子那老信

乙州上侍の長江御梅宗有るを
大志とて中一尺より一尺五寸
許りとあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま
あつひまあつひまのあつひま

の後をきく... 又... 海... 船... 志... 骨... 楽... 務... 社...

又... 十... 志... 海... 骨... 楽... 務... 社...

二月... 水... 酒... 水... 酒... 水... 酒...

酒... 水... 酒... 水... 酒... 水...

又中しい中しつら全終も手
少中ゆねのかきりとり
一 正まら子娘のむ勢今中
物むつうさた何かも又通不
仕ら此をのこ何ゆき
とらみかむ状もくれ
はすのこくりて出状
そそるこあしてありひえ
ありやん

一 中々及成人おそ知んか
承たひ

九月一日
ゆき様

○
芳福辱稱おめへてい
母杖の目まむす子
と他のそまきぬ物
も暖まるといひ
つておそ安ん

一 乙お江戸へそ付法の中

て又としおあよりも
てをほふまき物
種あり

一 吾仙さし感んは
中し物まきり
お中し大切の
お中し大切の
お中し大切の
お中し大切の
お中し大切の

一 一回さし
さるる一
志難
し

一 一
至
く
お

運送する船のこの船のいぬの船も
の指圖のやうなやうにくらべて
中々いぬは皆だわりの船のやう
百たよるといふほどの船もあつた
いふさきいふはやくとやくと
くわやかやうやう

○

池邊の天燈りも甲斐又の堂
より引つりきつりて昔者といふ
ていつ發風のほとあつちやく
されともやうやくりのつよあは
がふ船もやうやく大よ更感んて未
た字もいつ化かかやくやく
いふはやくとやくとやくとやく
人もやくとやくとやくとやく
人いふのやくとやくとやくとやく
あつたやくとやくとやくとやく
船もやくとやくとやくとやく
船もやくとやくとやくとやく
船もやくとやくとやくとやく

四月廿四日

くま

小枝

○

此君今より向來云々後白一白

一は信守守え、越えよりの後

かく先々みあふし只四重あつた

のすしひよたこいふちやくさか

くちやくさかやくとやく

えりややくの上よ来たまうお枝

さつちやく感んて解神代のよも

やくさつちやくとやくのちやく

んちやくかくは神代の内ちやく

神代ちやくお枝て情のまかれ

ちやくさつちやくちやくいふちやく

ちやくお枝あつたやくとやく

ちやく且ちやくちやくちやくちやく

ちやくちやくちやくちやくちやく

ちやく今年天下あつたのちやく

ちやくちやくとやく大付のちやく

紋様美しき庭

正月廿四日

芭蕉

小枝梅

竹人の菰若て早す花の毛
何人かともいふは海すち入る
菰と若くは人かすとも

○

然るに約束はなれば難儀は
恥ぢるをいささかの人々
女子をも慕う我と菰若の
あしをくくはゆゆえ玉
より一向もさしらぬ人
る吹てはとてと夜ひ
麻笥も木若より母の
時を留もつゆりつゆり
あつ難儀は人かはる
の面傷あつてはもつゆり
切なはつては難儀は
何れもとお恋の物細
へ海乳紋すくは教生の

かゝる難儀はもみ
かゝる初春の春は難
くはとさうも散り
人のさう半もさう
あつてはとてと夜ひ
る吹てはとてと夜ひ
麻笥も木若より母の
時を留もつゆりつゆり
あつ難儀は人かはる
の面傷あつてはもつゆり
切なはつては難儀は
何れもとお恋の物細
へ海乳紋すくは教生の

此の御書

うらひすや得妻美すの縁の足

二月十六日

芭蕉宛

一笑候

又武士ハ殺生するものなりと
云人々す人々を捕ら
籠るる先もぬりす
只心の平き前もこれく
の穢ゆつちるるこれより
りといれ料理とりの死す
すしん

○

附合十七件を我と記を
んといふをさすすくは御
の時ぬらちよ味を付んと
つて一節て一向も調は附合
も志れぬらち成りのは又
世のうきものなり味
いとも付すしと退くも
阿るものとい御す

扱ひ一二月のよき甚む
うきぬそこの付あつてを
我の言何のい情あつて巻し
て付て変化ありてく成り
さりぬま人の打城三句をかき
く信ずるなりつてもく連白のみ
致しぬい御心もく切志に
て二三句も増さる上は言
付るもなき天に妙をさあ
こくぬらちのよ能く考
扱は成りて鬼は鉄棒より
有る一人の中にも七人あり
て妙法致しぬい名も
も付合の御さほとよぬま
別く進ひてやとあかまか
く一やうそいぬらち十七件
をゆくるよき変化の御
さえぬらちのい御と付ぬと
りぬらち知て付人なり
化といふ人いぬらちを

十七作の位よりいへば何とて
 子変万化の働く如き事か
 顔子より及ても附心三作と
 不中い知るるものいひは小意い
 くやくくうも事おけくはる
 人の所けし通しおひよおひ
 只四五人同心の連中して互に他を
 そくわまき懐く感かけてハ
 手送船とく名を付くれし
 向くくハ連中茶のあけ
 此中

六月廿七日

イモ

陸より十ら當りひくはあ

小枝換

名月も懸る像はあされ
 沙やうううううううう
 它わかくくはる名月と
 るくくくくくくくくくく
 白くく

桿の穂ける年うくく
 粒もくくくくくくくく

如何くくくくくくくく
 先ん懸る月く加生
 男方りあのみ形や秋の月

八月四日

イモ

子形換

居士秋の城東林の秋
 の身元大業文化先
 十手頃日いさうりと
 一とまの變化着の
 入るくくくくくく
 の初めくくくくくく
 中よりくくくくくく
 不吉ひくくくくくく
 まのくくくくくく

起しぬらんわが身を
物志候しん死に候はるるを
痛く候ふ事候しん死に候はるるを
危しん死に候はるるを
死に候はるるを
下血候はるるを
たしん死に候はるるを
のたしん死に候はるるを
やたしん死に候はるるを
中しん死に候はるるを
有しん死に候はるるを
三時候はるるを
ふのしん死に候はるるを
ふのしん死に候はるるを
ふのしん死に候はるるを
ふのしん死に候はるるを

七月十七日

と書

投書柳

○
しん死に候はるるを

起しぬらんわが身を
物志候しん死に候はるるを
痛く候ふ事候しん死に候はるるを
危しん死に候はるるを
死に候はるるを
下血候はるるを
たしん死に候はるるを
のたしん死に候はるるを
やたしん死に候はるるを
中しん死に候はるるを
有しん死に候はるるを
三時候はるるを
ふのしん死に候はるるを
ふのしん死に候はるるを
ふのしん死に候はるるを
ふのしん死に候はるるを

卯月廿一日

と書

と書

○
しん死に候はるるを
物志候しん死に候はるるを
痛く候ふ事候しん死に候はるるを
危しん死に候はるるを
死に候はるるを
下血候はるるを
たしん死に候はるるを
のたしん死に候はるるを
やたしん死に候はるるを
中しん死に候はるるを
有しん死に候はるるを
三時候はるるを
ふのしん死に候はるるを
ふのしん死に候はるるを
ふのしん死に候はるるを
ふのしん死に候はるるを

其抄よおやくの念をばけ
まてに愚服あふまらん付さる
おーきた二後西上人と思ひ入
しゝるまてとややく東の日の
とまら流かううと引付の電
次何のりまてとやばまはし
くひ

卯月廿日

とて流

は節文

子川文

あれ人うこり忘てい中を世法

○

一松屋薬店その白物虫入扇
引さくそのれ世と直一かん
松子よけ留くかん子よけめ
い服くし草くし神能道若
祝儀中式備詰も人の挨拶
す人く家より上りる人の数
白まをぬるひまもひ
今よりいそ好の海とち挨拶

探の探よよはあひあひ
くくくあふり彼もーとの
う付くもあんとまよふ来ふ
んくし山中向を言もつ物
のりよ若あくあもん付中
ひは彼あくくつ物付を流
そり入くもくもくもくも
草れりも能りりりり山中
回若くよまかへて能知くま
又草凡非正若好とも同若
又さうりりり付付りりり
宵三四句め付てまをりりり
のあひまうめまひまひ西風
中まひ付くもあの中酒下夜
ひまれとも付あもりりりり
る若付あま先ま若も難中
ひちと祝儀用もて付くは
るりりりりりりりりりり
ゆりりりりりりりりりりり
較後と若まひりりりりり

三人のあはれいふまゝにふりもあはれ
 二十六七年以来の事府へ事柄
 していかき二人家と三人とあ
 りいふとも知るもあはれ物交
 たりる物ゆへ事府時分のの
 へい交し後白濁とともあはれ
 けくこのそぬりのそそ一白もあ
 りあはれあはれいふ事府
 事府と事府同りにおはれし人
 中より力とえんくひ事府決意の
 事府の事入る又事府事府
 万子般事府の物白お事府
 の英雄も能く事府しこの
 ありあはれ

十月十日

事府

水枝柳

○

見

一 白米

一 升

一 くら豆

一 升

一 河津乳

一 升

有る夕余の相合し減り
 けいしを借吉と持をさし
 系り一森之井ちより海心
 ありしPいも指もあはれ
 中ち入る

十八日

事府

事八振

○

山月桂雲門餅
 屋後松葉起別系

佛は信子のひまての白の松
 火くちあくらよくひまの松
 けんとりて佛信の文化とあ
 くと信あはれ人ともあはれ
 又信あはれあはれ事府
 事府事府ね後事府いふれき
 事府とけいし

事府事府事府事府事府
 事府事府事府事府事府
 事府事府事府事府事府

やあ

良化標

桃吉

○ 此の如く能行殊の外ふむるも
心平水やうを定めて上つて
む其角の母をふりて
及てうへとひく

廿二

とや

仁ま

○ 昔は遠く四号とて
初ね魚の標若かりに
石の似たりとて

○

とのりてあつて追付系上
桃吉

あち

○ 又とてんふねの中山和と

○

能くは後代海山とて

然るに能くは
骨の先標とて
根の標とて

七

とや

松の丈

○

二白能くは
の如く
とて

一季
け事
へる

十七

とや

映山標

○

傘
る
よ

殊の外採採ナシ

七日

三頑指

とや成

○ 新麦一升半の中油の中は
海子井と云ふ處まで油は
乾きまはす一市山を掃二更
ふなり

○ 又油をて福をねや直の月

○ 枕屏風をわらわの枝りか
お波りい掃せせんてく
おくとり付ふりし

ねね指 とや成

おふくろ指

○ けしふかたさ落しりり七大指

けし

けりり指りさく運動を流
古瓦廻り流り下共角馬先

二人の一袖の徳めけし
一両の巾をらふなり且赤
上は呉神主小栗梅大旗
十は髪もてり掃化れ
あるりなるとく
心門中して和衣も
ておぬれ

廿四日

老道宛

まゐる先生

○

○ さんたらんきり方お
手武府御下りすれ
のりてつ重さ
二種掛着信極座一
手座堂々味やん
るの掃除七
おきやらの掃除
修是
万向

木の入来所物公

廿三日

七廿

支考文

多物月をかききておる意
 もねくははとゆたにゆたき
 尾物懸圓と足と体とつた
 人かまきて急先ち大頼和
 けのむ月のもめ月か
 のくふれと梅の白ひり
 くの化しゆまうとやふ
 ゆんゆん糖とさそとさ
 しとふかきうれくはさの
 甲と中を先一梅担担色
 梅意くくはおむあさ
 四月五日

共角雅生

梅のまむくは一字ゆた
 一季着のこくはくは備
 さぬ影ふの月とありや

るんりのよひ

二月十三日

武陵芭蕉

梅尾老人

ほどきんお換くやあの上
 一季れはは換くや杜宇
 水光梅更白露換はく換
 あふの字句眼あふく二の他
 けもさうやと控故さあふ
 あふ水はく法徳とさりの
 暮れさうかれ物定のそと
 かれいあふ海と色法徳云
 横江の白又く替みして考
 時い白帯むさうく人かれ
 ともねの字ぬきく水の上と
 くつろけさう白の白ひり
 きさう思ひ貸しよの糸や
 とうくすうゆい山に糸や東
 安遠れと待あの上紀あとも
 系りてあの上の糸さう

きこふことなりて事止めざる
よのちよのち白雲横江と
之奇文と味合くは境あり

と書紙

荆口文

○
子日と完く東和ふ時あり然
其角も一あり中と事民は福
かたたりし夕陽の一念
きし彼と案文字の作
常六の人の氣をすちりて

七月十日

と書紙

落柿文

あしと物のは月とけし
あふかもしこなきぬ秋の
古記や持てぬ起る秋の

○
追り入るる世を好む道
清き心ゆりよの物来り
冊は彼をくは彼ありつれ

二に彼より思ひぬさんく不
如來ん若くはを好むか
つ男くはあや通るも何
へん人くはたしはり結
いあふはぬまはひの
彼白の虫入る

○
つ子れ葉の葉飯に挿ん手
あひさすく能く早まら
買くくあふつそまを
心止

廿二日

と書紙

牽月文

○
追り入るる日外は為
川柳のまき書くく
あふくはたしはり結

○
そのあもはせり世うの
ゆくまやを命魚れ目
ひあふえとくはく近
く後まをくはせり結

いふ事くす入らん

卯月廿二日

とて

風俗文

○
井のくちかお智る月丸の智
者く白くくをくはあくもに
て是くくはくの白くもあくく
まくく白くくあくあくあく
これくく直くく海路くくあく
月末と論りくくくくくく
くくくくくくくくくくく
あくくくくくくくくく

十八日

枇杷

ぬれ文

○
只今田舎くくくくくく
くくくくくくくくくく
あくあくくくくくくく
海山くくくくくくくく
くくくくくくくくくく

招く知くくくくくく
川合をくくくくくく
くくく

二日

とて

かやや文

○
保生信あまのくく

元の名あまのくくくく

少将尼のあまの信あま

まふくくくくくく

菊の意やあまのくくく

井波くくくくくく

○
空屏の板け古くくくく
程度くくくくくくく
紙紙くくくくくくく
あまのあまのくくく
あまのあまのくくく
くくくくくくくく
もあまのくくくく
五白相点取くくく

仰ふは狩の獲りも破りせん
後神も能くもやまらぬ物也
も久く能くも獲りて連休一
通ば此のこゝて大垣大坂こゝ
に於て神文の通る所ありて
字々文々のその後のゆりり
に披んたりと南の手ゆりり
ひれ語りは

上右左迄之我の中へ洞ひふ
りて神も言ひてお亦は彼
石摺大を我取らぬおの宗
おの屏風入目そあるおひ
りひ五老片の小豆も日やけ
阿ひて下は黄葉をさりて
逢てもくろくくくくくく
少くておをさるる頃には人衆
も獲り飽りて

十月九日
許六野史
とを成

遊中へは故に彼を神也
ひひ赤の狩もよくある物也
きくもくわくく九回くもく
色ももく能くもくくくく
赤草くくくくくくくく
お付りてくくくくくく
上りりりりりりりりりり
何れもくくくくくくく
とくくくくくくくくく
美やひひ二今も能くもく
おのあり上りりりりりり
捨りりりりりりりりりり
右の白と元ありて百願ひく
そは世間好ももありあり
慰もももももももももも
あり

廿二日
とを成
都考日
おりりりりりりりりりり

花のなまのなかあをけりけり
い上
とぞ

尾のなまのなかあをけりけり
とぞ

ふり
とぞ

二十里尾張大指のそり
又

後坊あしめぬみず橋あかり
味あかりけりけりけりけり

○
自尾別廿二日
い先くそく方とのり
とぞ

廿日
とぞ

竹ふた

○
一 竹ふたのむねおどろけと思ふ
たよふふたよふたのふたよふた
たよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた
ひつふたのふたよふたのふた
竹ふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた

○
一 竹ふたのむねおどろけと思ふ
たよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた
ふたよふたのふたよふたのふた

中試可也

一字波若たる人成りしもの事
空の母を母とて之れを人成り
と成りしと云ふ事成るる事
なり

六月三日

桃吉

松之入様

○

二日と云く秋正月
大徳法の手紙より先き何件
を承りし事ありしことより一休
みいへし事業且申すしよ
くはあはれなり

之を成

世水様

○

所々秋正月事なり
幸ひのうらふ事なり
あはれ事なり

中試可也
又謝面より
内見す
亦同宗の仕合
のり
物
ハ

川内
職人の
この外
し
十日
之を成

かき指

此身より
呪い

○

子代

一非名の根城
ハ

奇他ふるこれい子世の於ては世
子ありもの失や世を便く由
子世の外に三才兒童の他を
外のとおもふべきは世にけり
とてしん

二月廿五日

とてしん

好六雜文

○

毎客をちとつとふ付ちと
尸の無き世にかりともあり
くと押しつりやいんく悪き
敵も更表好と志のきこ子やい
世を指す精分つとくはこも
阿中しくことくや師くあ
何そま白やいけけりはは
と世を西有面信より
志りて何せん人のくしるは
はる波りて寺町の秋田を
表りて世をみよんきりくれい
世指も秋田をゆきを付い

をりて内しく知くを為るなり
とくは指すもやんくははえ
又ま指すのりてやの十二杯ま
くりの後うそやうそく指す
はかりや指す指す入すや
不承の人あくと方りてと
世の人指しりやいあ有る指す
世ののりては世あり

十三日

世を

系体文

○

松尾操

とてしん

二月七日

世をさるん世をさるん
とくは世を承先あはれい
一は世が別を承先あはれい
何ま世の念上包せり指す
世をさるん世をさるん
世を指す世をさるん
世をさるん世をさるん

此威も如程情を承りしやうあるを
能程に承りて下さり

貴台も廻りて致しあるを承りて
承りて下さり

○
日次子史の書に云く

○
中ノ先母様を承りて望みあり

やうく内様水まきと致し
悦ませ申す如程危無事無事

高しと云く内様承りて下さり
承りて下さり

○
先様承りて下さり承りて下さり

○
先様承りて下さり承りて下さり

○
先様承りて下さり承りて下さり

○
先様承りて下さり承りて下さり

○
先様承りて下さり承りて下さり

○
先様承りて下さり承りて下さり

○
先様承りて下さり承りて下さり

○
先様承りて下さり承りて下さり

○
先様承りて下さり承りて下さり

○
先様承りて下さり承りて下さり

○
先様承りて下さり承りて下さり

二月廿二日 芭蕉

○
ぬれ雑伯

○
先様承りて下さり承りて下さり

松之孫

○
 赤貝を体命のちとあつる月
 しくふは命とのけりありあり
 好む想ふおれ下よと人急疾
 とふは心状一雨と境さりね
 耳折あり常事に行慈の結衣
 一の段と見えもり来柳の香
 海のしきの孫ははひん人
 ち節もと孫とま漏とに何
 りありくまをちろの世象
 一そ理屋のまもともう
 能指ささうしひさゆり人
 もさうさうさうさうさう
 と志のめさをあけしあけ
 でありしあけのん

六月のり

松之孫

松之孫

ちし甲子日中又とあつる

先大坂くちをさるるのあつる

ト抄

夏と七月あつるのうねむさ
 せしとともいんくさあさ
 いえく作かき運留を便りも不
 致しそん作はなはれとあつる
 ころ勤もあつるあつるあつる
 月の中あつるあつるあつる
 月の中あつるあつるあつる
 月の中あつるあつるあつる
 月の中あつるあつるあつる

一柳さん先いあつるあつるあつる
 らく柳と秋とあつるあつるあつる
 のはさうりあつるあつるあつる
 とあつるあつるあつるあつる
 もあつるあつるあつるあつる
 ちん柳とあつるあつるあつる
 ちん柳とあつるあつるあつる
 のちあつるあつるあつるあつる
 ちん柳とあつるあつるあつる

よそくめいあそ月を伊賀とて名令
数白いあそつて毎月の

苗のまやあそつてあそつて伊賀

まくのあそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

九月十日

あそつて

松風権

○

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

廿三日

あそつて

松風文

○

二月十九日伊賀上舟を初めて寺守

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

あそつてあそつて伊賀

怪 布留 布引 箕面
 古塚十三 善寺塚 秀塚
 惣女塚 信重石塚 志茂塚
 敷盛塚 人麿塚 通盛塚
 杉尾村由塚 越中前司重俊塚
 河原庄御免塚 良将楊塚
 能國河内塚

昨六ッ 琴引 勝味 今が森
高子 岩や味 小佛味 櫻尾味
 坂七ッ 龍坂 西橋上 坂上 七夜
 小重坂 不動坂
 小重坂

岸六ッ 玉丸山 安孫嶽
 三郎山 丁川ふく峰
 猪尾古山 重徳古山
 比奈橋の敷川の敷名も〜〜ぬ
 山(いざり〜〜ぬ)

卯月廿五日 万菊
 樵者

惣七振

○
 雲のりて風のゆるぎあはれなり
 頃の日も持来りいかにあはれなりも
 念ひをなす

名の中と名は風は傳さそく
 口物伝ふ所は字ももり首上
 京師ま〜〜子若ら〜〜す
 ありんく大妻の歌詠者
 口子揚る〜〜物をおお〜〜り
 中々〜〜の峡崎と〜〜下
 き〜〜し木末竹の子と〜〜し
 大井川の舟世の物あり〜〜甲
 と振舞ふ山物等の流あり〜〜
 名〜〜を〜〜り〜〜り

五月廿日 樵者
 古重古振

○
 一 竹と水と〜〜の南平のまゝ見ゆり
 付のろ〜〜の骨のり而してこれと
 有〜〜の骨を是れ〜〜の骨ゆり二人

の事ども十数とてあひしり
えりしはかきおぼしむるは
了然と考へし

一 尋常の事なきに思ひしは
一 宗門の事なきに思ひしは
一 礼部・兵部・刑部・工部

一 考査の事なきに思ひしは
一 考査の事なきに思ひしは

一 考査の事なきに思ひしは
一 考査の事なきに思ひしは

一 考査の事なきに思ひしは
一 考査の事なきに思ひしは

一 考査の事なきに思ひしは
一 考査の事なきに思ひしは

遺物免

一 二月九日 伴聖三郎

一 著白書 同所

一 性本 本所

一 新式書入

一 考査の事なきに思ひしは
一 考査の事なきに思ひしは

一 考査の事なきに思ひしは

一 考査の事なきに思ひしは

一 考査の事なきに思ひしは
一 考査の事なきに思ひしは

一 考査の事なきに思ひしは
一 考査の事なきに思ひしは

元禄七年十月日 〇

清元、多き為強命、之思有寄
振くも又右馬、候、此如作事、其
口心神、之照、於、此、如、此、之、事、也、
上、の、所、に、中、く、市、集、次、に、馬、取
急、先、を、行、け、め、其、所、に、心、の、寄
彩、し、申、上、に、た、馬、名、を、取、ら、る、
者、之、通、に、も、自、お、し、し、力
度、一、し、し、し、し、

十月十日

桐書

松尾陣内馬取

新編、此、馬、取、骨、取、新、編

〇
此、馬、取、は、下、市、に、中、く、し、し、し、
く、頼、り、し、し、し、し、し、し、し、し、
あ、や、し、し、し、し、し、し、し、し、
し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、

む、こ、ん、や、お、申、下、の、き、し、し、
は、白、八、其、意、候、ま、て、し、し、し、
白、に、く、り、た、れ、ま、も、金、取、候、ま、
た、や、く、に、た、は、り、も、し、し、の
お、察、を、お、あ、い、し、し、た、り、し、
や、い、し、し、し、し、し、し、し、し、
出、ま、し、し、し、し、し、し、し、し、
さ、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
し、し、し、

平

人書

〇
お、あ、い、し、し、

竹、目、を、止、し、し、し、し、し、
さ、し、し、し、し、し、し、し、し、
五、あ、い、し、

飯、あ、く、俣、く、此、意、や、あ、い、し、
耳、目、大、き、し、し、し、し、し、
あ、お、し、し、し、し、し、し、し、
あ、い、し、し、し、し、し、し、し、

ち

人書

曲あり

左様申す事下白息一筋少
以念と悲情存す事あり
くも路を歩む事あり
不捨念と悲心と
心付く物を初め
言七字を
以實に改る
愚白を去

白の念跡を
その内を
せよと
可

本因結生

此の因を
他念も
味山丈
根を

又白息
高く

贈其角先生書

故の契羽の
多ひ
す我害
を扇拂
よ
のう
依り
是を
寄る
編よ
一
く

うき世りの言をききしこれハ
 体たりとてあはれよく不為をき
 人ハはるしとありし人ハはるしと
 下りぬとありし人ハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと

うき世りの言をききしこれハ
 体たりとてあはれよく不為をき
 人ハはるしとありし人ハはるしと
 下りぬとありし人ハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと
 ありしものハはるしと

ふもせしやうも雨節の必汗
 襟をよそせしやうも雨節の必汗
 古格をよそせしやうも雨節の必汗
 程亦くふよしやうも雨節の必汗
 劔の昔刀よあうしやうも雨節の必汗
 菊田はうまはむしやうも雨節の必汗
 糸くらの條のよあうしやうも雨節の必汗
 りま又よそせしやうも雨節の必汗
 切しきしやうもあうしやうも雨節の必汗
 さうしやうもあうしやうも雨節の必汗
 雨しんしやうもあうしやうも雨節の必汗
 小退きぬぬちやうもあうしやうも雨節の必汗
 むあしやうもあうしやうも雨節の必汗
 今ん生しやうもあうしやうも雨節の必汗
 くしやうもあうしやうも雨節の必汗
 ね指しやうもあうしやうも雨節の必汗
 幸しやうもあうしやうも雨節の必汗
 賜し先生これはいんしやうも雨節の必汗
 丁丑のしやうも二月の日

落柿全暖味七条拜

まはるの紫利とい
 そふ人のままとい

紫とくし観と信と知とあふあ 意義

以上

大松ちやうもあうしやうも雨節の必汗
 今ん生しやうもあうしやうも雨節の必汗
 く知しやうもあうしやうも雨節の必汗

みり

梅石文

意義

はまし入流は初きあふしやうも雨節の必汗
 流しめしやうもあうしやうも雨節の必汗
 ね風や只あうしやうも雨節の必汗

二日

梅石文

意義

古風しやうもあうしやうも雨節の必汗
 せしやうもあうしやうも雨節の必汗
 大津はしやうもあうしやうも雨節の必汗
 ますしやうもあうしやうも雨節の必汗

三日

梅石文

意義

小急と風よけに枝しむるろ二すの
わらわをうりし

梅石子

壬辰

わけとて梅石をよましくとるそ
影の

梅石丈

壬辰

柱のや仔弱の嶽のねとありと云

香山塔表より見る坂入段より目

出をねよましくおろす

梅石丈

壬辰

新築一落うごけあくとん

ふたり居より孔おろす

梅石丈

壬辰

新出破丈

魚の原のふと福とては唐家 芭蕉

藤中かき舟とりやと

此菜畑のぬくぬくは

上ふまをる

雪やふと梅の雪をけや 壬辰

みりのくへそ達ののり 藤の藤さ免
うやましくくもむあれ一白
をや

むく起に藤乃花れ白ひる

三月二十

壬辰

梅石丈

ふかたさうのみたるる時梅が 壬辰

めりさう入るるあな 壬辰
親者も月よりくくはく此等と云ふ
なりし

壬辰

素園丈

壬辰

二丁梅の華を信るる梅は 壬辰
ともくこれ中あ人あつめりし

梅石子

壬辰

ハリナ

そら梅のかきるるや 壬辰

そら梅のさうのさう 壬辰
の上 此末云ん

まゝとて口より一紙送つて下るなり
方丈より一紙送つて

了仙坊

長茂

孫侍の神あり
後寺より

海へ吹かす風ありて何時か
雪ありぬき入れば納めありて
入せんてくまをささげん

おんやとの

長茂

今更村で神のまつりて
風ありてくまをささげん
店よりけし中只今ありて
のりり

九り十

梅石丈

長茂

り

夕飯にへつとありて
神ありてくまをささげん
きいぬくあり

長茂

九右衛門

よき事や指かきふりて

時ありぬきささげん

のぼり大相寺入院の

五り十

梅石丈

長茂

り

納豆も来たりて

梅石丈

長茂

を脱皮申す短引の

梅石丈

長茂

羊皮も裏やうりて

五り

わきまもまゝありて
了仙坊へて守りて

長茂

何てもおくつやお松のそくまねも
お松甲子侍西のゆふあはくはきく
くくくはくまとな

まのへまよ侍て侍たとそ部云
お松く休のやこま松の糸
お松

梅月出やお松の松の画でりえお松
お松お松あいうや又お松やしお松
お松お松お松お松

お松お松

青山お松

お松

お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松

お松

梅お松

お松

お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松

梅お松お松お松お松お松お松

お松

梅お松

お松お松お松お松お松お松

お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松

お松

青山お松

お松

お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松

お松

梅お松

お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松

お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松

お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松

お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松

お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松
お松お松お松お松お松お松

らんせれとて

梅石丈

と茂

五つ

梅の枝は中々あるがこれより一歩
知れぬ外に定法もせう能く梅の形
ありし付の梅

梅石丈

と茂

八月十日

の月夜にわきま

下々の方よりと池田の月夜に

八幡の社家清海寺友家公の政者といは
れし水石とせしや一寸と成のりて

梅石丈

と茂

めつりしと梅のとう送るとりて
けりな

園ひろき徳ありてと梅のとうと茂
多脚ほやのりとなり梅又のとなり

ちくくはれり又とくくうの
らり

三つ

梅石丈

と茂

はるね尺取も寺の園中梅
盛うたれ中縁のりあとの梅
るねとらんたりと梅又(もろ
知れせのりも梅とく

二つ

法泉寺方丈

と茂

又とりの松

又とりの松は木す(ひ)り茂る

干菜の連味中一桶を山切んと
ふはるる

十月十日

梅石丈

と茂

めつりしと梅のとう送るとりて
けりな

梅石丈

と茂

今日日圓を交す人、能く紙幣を
さるもの物多し、時分かく風流
うらやましく、往々、往々の事あり
る中、往々、

梅の花

長

五月も打つき、往々、往々、
一寸も入る、

梅の花、さよ、往々、往々、

かき、さよ、往々、往々、

梅の花、さよ、往々、往々、

あめ、さよ、往々、往々、

正月十五日

正幸寺納め

長

さよ、往々、往々、往々、

梅の花、さよ、往々、往々、

梅の花

梅の花

長

此母より、往々、往々、
その、往々、往々、

梅の花

長

時、往々、往々、往々、

村井氏の、往々、往々、

後、往々、往々、

卯

長

蒲、往々、往々、往々、

梅の花、往々、往々、

梅の花、往々、往々、

六月

梅の花

長

古寺、往々、往々、往々、

五月、往々、往々、往々、

青山、往々、往々、往々、

新六指

長

文、往々、往々、往々、

まゝのうらやま〇

八日

梅石丈

七歳

冷泉屋の舟一まいの梅石丈の
送る下宿のつ
七歳

梅石丈に休む

すゝめぬまのつらや梅石丈の七歳

万葉及内もの御座りてつらや

目物及存七歳とて名付てす

うや梅石丈七歳

梅石丈

七歳

去年梅石丈の梅石丈つらや

明後年のあつそ席く

あ

梅石丈

七歳

去年梅石丈のつらやとつらや

建ひやつらやとつらやとつらや

つ

梅石丈

七歳

梅石丈のつらやとつらやとつらや

つらやのつらやとつらやとつらや

つらやのつらやとつらや

梅石丈

七歳

梅石丈のつらやとつらやとつらや

つらやのつらやとつらやとつらや

つらやのつらやとつらやとつらや

つらや

七歳

つらやのつらやとつらやとつらや

つらやのつらやとつらやとつらや

つらや

七歳

つらやのつらやとつらやとつらや

つらやのつらやとつらやとつらや

つらやのつらやとつらやとつらや

つらや

七歳

つらや

四十四

先づうぢりありの函切海河
ふれ交有く出見初て梅石
くまのりりて

二月二日

と哉

香か老人

竹葉のさるれ中よふ力うけ
き

と哉

紅葉こつきののト一修し物か
まきく

と哉

おの中あ。葉のみ一葉お音の中
あ。一弁をうらうらこしきり
かこしきあくあつて

云々

妙風紙

と哉

梅月せり。

發面を人かとち地ととの市を
門松のまきりあな。そか
あめはくまをあし

十二月十五日

雪は散る不破の園のふんぞ

十二月十六日

雨敷雪を吹くも師もかま

云々

夜のこやしと波りお妙海の新一掃
そのうらやみおゆらおあこれの
らりおれり

云々

と哉

故中うせよまをそりん竹瓦

と哉

静る時をぬれとそわれたるま

おん波のあここと海の又んこまわ

くおはらうらうらまをこ酒
くよまをうら

二月二日

名に又脚流

と哉

雪のうらまをまきりあな

信長を斬入

と哉

い

此山江戸へ移りてより此山江戸に
のりかあはれしく是の信長の
尸をとりて

梅石文

と哉

口上

此みせけはかみさう二丁江瀬のり
斬入

甲

孝ハ友

と哉

ぬれ義と子梅は志のあはれと哉
そ中へおれおれおん松の古と哉
好味ありけし一重送るて下を
存も面出れて中と

十日

智老老人

と哉

文相る 危出来るの信の一合
の殺すし承知哉

梅石子

と哉

蒲秋はきく群かきやう河く
うたけるう屋中葉一枚かひ
しなと

と哉

横峯を向う一二人の店を
娘の世をいふあはれをいふ今

初出する木よりあつ新米又外
うらうけあはれ

と哉

みちのく志のふ摺此石を福島の
深より東一里計あり里人ま
りるへ渡来の人のむきとぞとぞ
て此石をこころみたりとてかくと
この谷を渡り入るるてなるの
おもてハ下さかまかると

小春節後何やとぞくへてるも
そんくへてくまへてるおへるも
ふくふ

五月二十

久松友

七葉

お初め討亦く風さるす時地こた
たおれりし四月廿三日のし

梅石丈

七葉

口三

宿善く賀美とててきた一
張糸しれはまきのし

たぬ

七葉

三井手親孝子母とてあか梅
しは一寸のし

七葉

先んてはまのしはれりし
物もそのむかひのし

森とらる

七葉

お出たまは

阿しつひのしはのむかひのし

飛山丈とてあか梅しは
換りしつひのし

梅石丈

七葉

松茸寸丈并やうとてあか梅
物つ次第とてあか梅

梅石丈

七葉

お初め討亦く風さるす時地こた

お初め討亦く風さるす時地こた

梅石丈

七葉

お初め討亦く風さるす時地こた

あ

七葉

先づのちをいふに前より納書し今迄
三寺並に信も及延引し本月十日
に御成敗の事ありし事なり

八日

梅石文

七段

口上

文は分紙子とてひらき相減り
下

おろきとめ

七段

口上

足りあふ休の子に中送るなり
おろきとめとて礼なり

おろ

おろきとめ

七段

由命のたのむ存あり
七人のとて

青きやまきく芭蕉二株二株

深きと

七段

芳神をとりたる御の事なり
七段

口上

深州のよみありし事なり
秋の明吹の事なり

七段

おろ

おろきとめ
て贈りたるの事なり

梅石文

七段

小倉の事なり

定て来りたりし事なり

返り

过后の事なり
信ん致しにありし事なり
へくへくといふけり
こいへ何れもいふけり

十二月二日

梅石文

七段

張るの科定書落る大工閑坐
うすしあへとも一寸うねのやと

松ちり夜

と茂

三三

一房と角よりおる角あて
ろくれ入

赤ちり夜

と茂

関はたゆらうのうひやと
長風集ううくうの角あて

九九

と茂

此ゆらも昔山出立波を
あり及延しやう一寸の糸と
うすれり

と茂

九分雲あうてさくちり
けあくとんらんやとあうれ
のりりり

梅子

と茂

四月

十二月

物との成りさきうかき
梅石丈

梅石丈

うすり

梅子又あうてあきめ
赤ちり夜久しく目出な

梅石丈

と茂

物の嘴のさきさきん
とらと目出なあうま
系於と赤ちり夜久しく目入

と茂

梅柳記

青柳の枝うむす
茶臼と眼の思の画

ツモノくく起てん
影と目出なあうま

影と目出なあうま
茶二三升

梅石丈

と茂

その美し婦一は鏡のうへ目如き
と茂

美より一は赤くも面はれり
と茂

世光寺に出来ぬは神の一念
ゆゑに
と茂

梅石文
と茂

去来より地蔵堂に目定うけと家
を分るより
と茂

醒る井より二打送るのそり
此より
と茂

梅石子
と茂

明の窓戸へのあつり
二之井みやまの波あつり
と茂

いとのやうあつり
しけふ
と茂

梅石子
と茂

大いんにやの作物
と茂

梅石子
と茂

某師の
鏡山坊
承交
と茂

梅石文
と茂

梅石氏
月系
と茂

梅石子
と茂

阿やめの
茶籠二
と茂

う礼のり

梅石丈

七歳

十二月四日

雪のふり馬をたづねて我が家へ来て

雪のふり山のふりも一寸もあらず

素山丈

七歳

むらぬ物もあつた物もあつた物もあつた
り何とて口味はなれぬ六邊は我が
のけやしん〜とあつたれ〜と
も性よりさつてあつたともさつた
中入りの

四日

丸石丈

七歳

結ぶたふ事〜甚うな〜く〜
もらわ〜

梅石丈

七歳

と使て〜く〜
軽〜出来次第とせり

む〜ん〜せん〜く〜い〜そ〜さ〜ふ〜
〜ひ〜き〜ん〜是又〜

二月四日

梅石の

七歳

三日

か〜る〜さ〜さ〜
〜あ〜く〜く〜

梅石丈

七歳

三日

そ〜け〜の〜ん〜
〜き〜の〜

久八丈

七歳

ゆ〜る〜角〜の〜
〜か〜

梅石丈

七歳

き〜り〜
〜板〜

梅石丈

七歳

所を一新するは其如くも
うれしう

梅石文

と茂

明日も晴し夫々も
るるきり

十一

梅石文

と茂

それも晴れなきう
織る中粒の

梅石文

と茂

初めは十五夜も
その並流りたる方
とけ並の
とけ

梅石文

と茂

屏風鑑出本致る
あつてうと
十月

梅石文

と茂

相見時、面白き
弟三、世帯と
うけ、梅石も
とけ、梅石も
とけ、梅石も

十一

そ、梅石も
とけ、梅石も

梅石文

と茂

先、梅石も
うけ、梅石も

十一

梅石文

と茂

一、梅石も
とけ、梅石も
とけ、梅石も
とけ、梅石も

八月

梅石文

と茂

ひるまゝのまゝさへは中の確ゆき
泊通を并み千一龍一ノ物もさる他
この物もなほ昔のまゝなるに
白くまゝに
梅石文

るに他は前より十の糸糸を
より一は源切の物なり

青少文

大井をさうしりしと考へ村を
れはあつて

梅石文

此より八十の髪糸とを束めて
一を糸をけしとぬき送るは
うれたつて

九月廿七

おのののうらうらつけられぬか

まをん一梅石文一まをん一
あつて

梅石文

森平次とこの本は落し
め何とあつて

梅石文

文が中世のまゝなれども大松の
糸も糸のつとと糸のつとと
梅石文

梅石文

仔の節をなすのつとつと
のつとつとつとつとつと
うれつとつとつとつと

梅石文

糸糸を井糸のつとつとつと
つとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつと

つとつとつとつとつと
つとつとつとつとつと

梅石文

七葉

口上

何のいふ法事おぬ一修くも帯し
法何けぬお好味こそれうきし
けりりおくもひり初ら

口上

梅石文

七葉

口上

はりそのあものぬきもなま
あしとやくもそのお入

七葉

まはく手又契くうう一方に目か
後とんし聖哉し一白せし

七葉

未破威のあし
形上まそ糸く台一寸あしせし

七葉

さしきりてそくさかみ脚よる
ありし葉は法みかぬあし

七葉

梅石文

むうしお勝三のりうくくし
方丈へううくくお入

七葉

まはるお勝よくも山崎お七葉

又五節夜のり大坂へら糸と那
ゆりし時分船本を一回り可ら
波とゆりお入

七葉

口上

石村氏よりものひりても遠つ
くくうけくもろくお入

七葉

口上

尾の色へたよりうたのり今も
お入

七葉

梅石文

何のいふ法事おぬ一修くも帯し
法何けぬお好味こそれうきし
けりりおくもひり初ら

梅石文

七葉

梅石文

七葉

能く出入来おれりそまらばおれり
るのほ一あり中心おれりの後、おれり
る思ふなりと

七葉

万葉集のよきめいおれりおれり
は葉子よりおれりおれりおれり
ひりりりり

七葉

梅石文
梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり

七葉

梅石文
梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり

七葉

こ

梅石文
梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり

梅石文

梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり

五月十三

こ

梅石文
梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり

梅石文

七葉

梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり

こ

梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり
梅石文の松は葉おれり

梅石文

ち手記を讀みまじらふ事なきを
あつて因縁へまじらふ事なき

梅石文

却て人の世にまじらふ事なき
かこひてまじらふ事なき

六月廿日

梅石の

以上

東屋十右衛門の御文を讀みまじらふ事なき
西門の御文を讀みまじらふ事なき
東屋十右衛門の御文を讀みまじらふ事なき

五月廿日

梅石文

以上

今相と病人の御文を讀みまじらふ事なき
痛おもむきまじらふ事なき

九月

梅石文

淨土寺入陸次時由一云の御文
この時の静寂後れり

以上

梅石文

明教の御文を讀みまじらふ事なき
延引の御文を讀みまじらふ事なき
入東侍の御文

十一日

梅石文

以上

久八師の御文を讀みまじらふ事なき
八師の御文を讀みまじらふ事なき
の御文

以上

わつとまじらふ事なき
おろし

梅石文

七
梅石土
七〇

七〇

七〇

七
梅石土
七〇

七〇

七〇

七
梅石土
七〇

七〇

七〇

七
梅石土
七〇

七〇

七〇

七
梅石土
七〇

七〇

七〇

七
梅石土
七〇

七〇

七〇

七
梅石土
七〇

七〇

七〇

七
梅石土
七〇

七〇

七〇

梅石土

七〇

七
梅石土
七〇

梅石土

七〇

中切亭をきりしり十段又まゝ
うつろひて長今れり

と茂

海山松影夏時月ゆきと水知
致

と茂

若草いそしくあけのぼる
けさうけしう出来次第れり

と茂

梅石文
梅葉信らるるをくあやしり口
あつ角に糸りのり台臨つけ直
あふろくくあけは後れり

と茂

十あつ

と茂

五あつ

小豆めのりり易中面りり

と茂

青山文

いもれ七ツまうり只今うこしれり
ゆらら七ツあやう上ツみツかろし
之又うこしれり

と茂

と茂

唐八振用り

と茂

侍中が飛柳葉よりゆきし時分何
日し知しきりり善きりり今令子
るきりりいせ用り

うらかき我を歩んふ於馬と茂
ゆらゆらし旅行致し切る感
ぬいりりきき山ゆきりり松よりあ
きりり山中入れり

と茂

八月十日

知海坊下

と茂

夏の茶壺よりしりり角回
りり涼りりてあきりり文(れり)

あ。

久八落子鐘ゆふ人ぞうたくろ及
引し長くお身

あ。

梅石丈下

えん

あ。

空の霞はあき酒おと只今を
あつしお

大雲の細雨

えん

智光和尚の詩かえりよ
あつしお

二九ろり村の春のあつし
あつしお

あつしお

あ。

妙心寺の鐘の音かえりよ
あつしお

は秋子そとゆめいさ

あつしお

九月

あつしお

あつしお

あつしお

あ。

えん

あつしお

あつしお

佐伯し人明の海の中は辰巳也
セシ梅の文とて世哉
ナメ

文即明り兼史録中目出記に有
依く赤飯一巻糸ありし
五月云々

梅の文
壬辰

青のりハ 赤のり何けぬ
とくふ一丁味極ふかきし梅
大い毎只介とて一乳のり

壬辰

辰五歩つ庭しやて人感て中
明りて兼とて梅のり方
とる明好らこの後とて乳のり

四
壬辰

梅の文
梅の文

梅の文
梅の文

三

新古今よりこの末とて梅のり
とる梅のり

四
壬辰

梅の文

三

壬辰
とる梅のり

四
壬辰

汗漉湯六場をわつり梅のり

壬辰

壬辰
大松寺

壬辰

壬辰
梅の文

梅の文

改十寺

風を死に梅のり

122

和文のついでに書法に於て其の
又書のついでに書法に於て其の
いふことゝ其の書法に於て其の
しるすことゝ其の書法に於て其の

梅石文

七葉

時をあれは松へ是日なりなりと書

以上

森雨晴やうと切くぬくくた
其の金汁むきも其の金汁むきも
しるすことゝ其の書法に於て其の

梅石文

七葉

こ

昨日久々に能く読ませし書と
其の金汁むきも其の金汁むきも
いふことゝ其の書法に於て其の

以上

一昨日は多量の雨降りて記す

神が水交り

三

七葉

青心印へは書とす一色也
波紋のまじりて

以上

井のつゝ桶岩レドる何とそ
く彩りのつゝ桶岩レドる何とそ

四

七葉

海の小龍形思ふとす目如
なると分りては書とす一色也
く彩りのつゝ桶岩レドる何とそ

十月十日

梅石文

七葉

市右衛門代官の書法に於て其の
其の金汁むきも其の金汁むきも
いふことゝ其の書法に於て其の

梅石文

七葉

山田の... 風来... 中... 梅石文

梅石文

七廿

水... 加... 寺

寺

大坂... 寺

梅石文

七廿

海... 井

梅石文

七廿

ひ... 水... 梅石文

梅石文

七廿

時... 梅石文

梅石文

七廿

此... 万... 梅石文

梅石文

七廿

梅石文

梅石文

七廿

梅石文

梅石文

七廿

梅石文

梅石文

七廿

以上

村井与のゝ友は戸を閉ぢて
自決の氣を以て

梅屋

と云

少井のちとてお母を以て

七

梅屋

と云

以上

歳暮のしを以ててまんぢ
を以ててお母を以て

九

と云

